

ノーモア・ヒバクシャ通信 第14号

発行 2013年12月27日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>

ブログ

<http://tkf-forum2011.blog.ocn.ne.jp/hibakusha/>

発行者 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085

東京都千代田区六番町15プラザエフ6F

Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)

Email hironaga8689@gmail.com

郵便振替口座 00170-5-694752

(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

2013年最後の通信をお送り致します。みなさん、良いお歳をお迎えください。

★もくじ

- | | |
|---|-----|
| I. 12/14「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」のご報告 | P 1 |
| II. ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク 第1回打ち合わせのご案内 | P 5 |
| III. 『はだしのゲン』問題の練馬区教育委員会への要請の結果について | P 5 |

I. 12/14「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」のご報告

12月14日(土)の午後、東京・お茶の水のレン貸会議室「新御茶ノ水」で、「ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐつどい」を開きました。

遠くは広島、京都、岐阜、愛知、新潟からの参加者を含め45人が参加。全体企画のあと2つの分散会(①被爆証言の聞き取り×4グループ、②各地の取り組みの交流)に分かれ、熱心に話し合いを深めました。

参加していただいたみなさまをはじめ、今回のつどいの開催にあたりご協力いただいたみなさま、日本被団協と継承する会の「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ごう」の呼びかけにご賛同いただいた諸団体のみなさまにお礼申し上げます。

(1) 全体企画

全体企画では黙祷のあと、今年7月6日に亡くなられた山口仙二さん(日本被団協顧問)の追悼特別番組のDVD(NBC制作「命の叫び」)を一部カットして上映。14歳で被爆し、後遺症や差別・偏見にさらされながら、被爆者運動、反核運動をリードしてきた山口さんは、目をつむると「あの日」殺された子どもを抱きかかえて走り回っていた母親の姿が浮かぶと言います。奥さんに支えられながら世界へ発信した渾身の訴え「被爆者の血と肉と骨の叫び」、「ノーモア・ウォー、ノーモア・ヒバクシャ」が、つよい印象を刻みました。

日本被団協を代表してあいさつした木戸季市さんは、「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして、人類の危機を救おう」と立ち上がった被爆者が、統一と団結を守りながら世界の人びとと連帯して核戦争を阻止し、戦争犠牲「受忍」論に立つ国に原爆被害への償いを求め続けてきた日本被団協の誇りを紹介。継承する会の結成から2年経ったいま、秘密保護法などの悪法が次々につくられる危機的な日本の情勢のもとで、被爆者が語り、若い皆さん

が聞き、話し合うことは、国民主権や基本的人権、平和主義をまもる運動だと、厳しい状況だからこそ重要性を増すこの会の意義を強調しました。

(2) 分散会 1

1) 分散会 1 「被爆の証言を聞く」

26名が6～7名の4つのグループに分かれ前半の1時間は被爆の証言を聞き、その後で1時間程度グループディスカッションを行いました。証言を聞き、語り合うには2時間では足りないくらい、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

【参加者の声】

- 母が長崎で被爆しているが話を聞いていない。きちんと聞いておきたいと思っている。
- 今年就職して平和の担当になって初めてこういう機会を得て衝撃を受けている。被爆者の方の証言を聞くのは2回目で、被爆体験といっても人によって違うのだということがわかったし、少人数でお話を聞けるのは貴重だと思う。これからこういう取り組みを広げたい。等々、顔がみえる対話の中でより深く受け止め考えることができた。
- Yさんのお話を聞きました。Yさんは中学2年生の時に長崎で被爆。8月10日の長崎空襲の様子を近所の人にしゃべったということで警察に捕まり留置されたとのこと。びっくりしました。Yさんは特定秘密保護法が施行されたら、急に市民がつかまることもあるだろうとおっしゃっていて、ひしひしと恐ろしさを感じた。
- 被爆者が今後くり返さないために、国家補償と核廃絶を求め活動していることがよく分かりました。学校など若者に身近なところで今日のような聞き取りが行われれば良いと思いました。
- Hさんのお話、心に残りました。真実の声を聞けば絶対に戦争はダメ、核兵器はダメと声高に言えます。この貴重な体験を無駄にせず、今後、継承について考えてみたい。
- 皆さん、いろいろな取り組みに参加しているようで自分がここにいていいのかと思った。しかし、こうして証言を聞いて受け継ぐのに経験値はいらないと考え直した。知らないことは知って学んでいかなければならないと思った。

2) 分散会 2 「各地の取り組みの交流」

分散会 2 には5都県から18名が参加。愛知、千葉、高校生平和ゼミナールの取り組み状況の報告を受けて、熱心な交流がくり広げられました。

- コープあいち 被爆者の声を聞き取る会

生協のくらしのテーマグループの一つとして、愛友会、自分史の会と三者で8月に聞き取る会を発足させた。愛友会名古屋支部の役員が集まる場に訪ねて行くと、女性の役員が準備して待っていてくださり、初めて話すよと言いながら、手帳をとるときの苦労や出産時の不安を語ってくれた。男の人たちもそれに背を押されるように、被爆者運動に参加した思いを語り出した。聞いた側も、こんなに生々しく聞いたのは初めてと、その気迫に圧倒され決意をあらたにした。

月に1回、三役が集まり、月に1回どこかで聞き取りをする。集まったところでこつこつと会を重ねているが、若い組合員のお母さんにどうアピールしていくか、工夫・宣伝の必要を感じている。

● 千葉県原爆被爆者の被爆体験聞き取り実行委員会

ちばコープからの呼びかけに友愛会も協力して、昨年来1年かけて準備。コープみらいが発足した後の9月7日に13団体28名で準備会を開き、10月に実行委員会を立ち上げた。

県内を3ブロックに分け、生協メンバーと友愛会役員がそれぞれ入って、年内に各ブロックで2人の聞き取りをすることとし、すでに2ブロックでは終わっている。

県内の語り部は30人ぐらい。被爆者はこの作業は急ピッチで進めなければと焦っている。生協との連携は非常にうまくいっており、生協ブランドは心強い。このつながりを大切にしたい。

● 東京高校生平和ゼミナール連絡会

広島（1978年）、長崎（1981年）から始まった高校生平和ゼミナールは、80年代に全国に広がり、毎年8月に全国高校生平和集会を開催している。多いときは800人もが参加したが、第40回を迎えた今年は150人が参加して長崎で開かれた。ここで東京の高校生が全国の仲間に「被爆者や戦争体験者の世代と未来の世代を結ぶ“架け橋”になろう」と聞き書きプロジェクトへの参加を訴えた。

東京では6、8、11月と、高校生数人が被爆者とともに証言を聞き、話し合いをしてきた。原爆はもう終わった遠い昔のことと思っていた高校生が、聞き取りをとおして、今の私たちの問題だと気づいていくことが重要なポイントと言える。

● 討議のなかから

- ・ 被爆者の集まりでは、とにかく語って残そうよと話し合っている。原発事故以降、幼いときに被爆した人たちが語り始めている。生協ぎふには、国の償いを求める署名とともに、語ることでできる場をつくってほしいと呼びかけている。東海・北陸で交流会を開くのもよいと思う。（岐阜・被爆者）
- ・ 被爆者として、この会にどのように協力したらよいかを考えてきた。一人でも多くの人に被爆の実相を普及することは被団協の運動方針そのもの。この会として、話すことでできる場をつくってほしい。（埼玉・被爆者）
- ・ 会としては、聞き取りをしたいがどうしたらよいか分からない、という人たちの声に応

えて、聞き取りのモデルケースを実施している。ここに参加した人が、今度はそれぞれの持ち場で証言を聞く場をつくってほしい。(事務局)

- 9月から平和担当となり、被爆者の話を聞きたいと思うが、どこに連絡してよいか分からない。(新潟・県生協連)
- 県内の被爆者2000人のうち、語れる人は70人弱。絶対話したくないといていた人も、2、3年かけて初めて話してくれるようになっていく。話せる人も一人ひとりみな違う。(埼玉・生協労組)
- 生協として、ヒロシマ・ナガサキへの旅やピース・アクション、募金活動をしてきたが、もうひとつ広がりをつくりきれていない。普通の組合員にとっては、聞くのがこわいなど、気持ちのハードルが高い。特定秘密法、原発には高い関心をもつ今を生きる人たちにフィットするよう、工夫が必要だ。(コープみらい組合員理事)
- 「はだしのゲン」のまんがを活用するなど、ハードルを下げ伝えるための工夫をしている。われわれも変わっていかねばならない。(千葉・被爆者)
- 当時のことを思い出せない人を、何回も話したことのある人と組み合わせて会をもったところ、1人が話しているうちにふっと話し出した。ピアノ・コンサートや朗読劇と組み合わせた聞き取りも行っている。(埼玉・聞き取りグループ)
- ピースアクションの出発式での訴えなど、被爆者からのお願いと全国の動きが一致すると動き出せる。(岐阜・被爆者)
- 木戸さんの機密保護法の話聞いて、ヒロシマ・ナガサキを聞くことは、戦争を阻止することなんだと思った。また、他県の経験を聞き、生協にもっとお願いしてもいいんだと思った。一度でも聞いたことのある人を増やし、被爆者の生き方を学び、何かあってもがんばって生きていこうという人が生まれてくればと思う。(愛知・自分史の会)

3) 今後の取り組みについて

いま日本は、一人ひとりの「命」を大事にするかどうかという岐路に立っています。

マンガ『はだしのゲン』は、原作者の中澤啓治さんが広島で国民学校1年生のときに被爆し、家族を失い、苦闘しながらも生き抜いた自伝的マンガです。日本の各地で、学校図書から『はだしのゲン』の撤去を求める陳情の動きが相次いでいます。最近、こうした陳情を東京の練馬区教育員会は真摯な審議で不採択にしましたが、いまや被爆体験を後世に伝えること自体がせめぎ合いになっています。(同封チラシご参照ください。)

このつどいは、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残し、未来に伝える取り組みを各地域に広げるという目的で企画しましたが、これからがまさに本番です。

「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐための手引き」を参考にして、取り組みを広げていただきたいと考えています。「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐための手引き」、「【聞き取り票】ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう」を同封しました。ご参照ください。)

1. ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう」では、取り組みの手順や留意点を記載しています。これを参考にして、それぞれの地域、身近なところで被爆者の証言に耳を傾け、語り合う場をつくりましょう。

2. 「聞き取り票について」では、証言の記録の仕方、また、体験を話したり聞いたりするときの糸口として、質問項目の例示を入れてあります。被爆者の証言、受け継ぎ手の思いを記録に残し、それぞれの地域から発信していきましょう。

3. ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワークについて」では、このつどいを受けて、各地の取り組みを結ぶネットワークを形成します。ご参加ください。また、それぞれの地域でも取り組みを結ぶネットワークをつくりましょう。

II. ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク 第1回打ち合わせのご案内

12/14「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」で各地の取り組みを結ぶネットワークをつくることが提起されました。このネットワークには被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承に取り組もうというグループ、個人どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。また、それぞれの地域でも取り組みを進め、地域のネットワークの情報もお寄せください。

【「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク」の次回日程】

(日時) 2014年2月15日(土) 13:30~15:30

(場所) 主婦会館プラザエフ5F会議室

(内容) 情報発信、ネットワークづくりなど、

III. 『はだしのゲン』問題の練馬区教育委員会への要請の結果について

通信13号でお知らせした通り、『はだしのゲン』を教育現場からの撤去を求める動きについて、日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の連名で練馬区教育委員会に対して「要望書」を提出しました。

12月2日、練馬区教育委員会で、学校図書から『はだしのゲン』の撤去を求める陳情は不採択となりました。その経緯と今後の動向については、同封資料をご参照ください。

以上